

群 教 セ	F09 - 01
	平17.231集

協力して問題行動に取り組む学校風土を 高める「ほっとルーム」の在り方

—— 教育相談部の機能の充実と活性化を通して ——

特別研修員 長沼 裕子 (みどり市立大間々東小学校)

《 研究の概要 》

本研究は、職員間の温かな人間関係をもとに、職員室の中が子どもに関する話題であふれ、教師が抱えている悩みを仲間に相談しながら、早期に解決できる環境や共に課題を解決しようとする意識をもつ職場づくりを目指したものである。教育相談部を中心とした「ほっとルーム」機能を「委員会」「タイム」「たより」の3つの柱とすることにより、協力して問題行動に取り組む学校風土を高めることができた。

キーワード 【問題行動 ほっとルーム チーム援助 コミュニケーション】

I 主題設定の理由

本校には、不登校をはじめ善悪の判断が甘い・自己中心的な言動がある・感情のコントロールができないなどの理由による様々な問題行動を抱えた児童たちがいる。こうした状況の中で、問題を抱えた児童の多くを一人で抱え込み、解決策が見つからず対応に苦慮している担任もいる。

この現状を変えるには、担任が一人で問題を抱え込まないような工夫や教師自身の教育相談の力量を高めることが必要である。また、職員間の温かな人間関係をもとに、職員室の中が子どもに関する話題であふれ、教師が抱えている悩みを仲間に相談しながら早期に解決できる環境や共に課題を解決しようとする意識をもつ職場づくりが必要である。

本校では昨年度から、様々な事例の中に組織的な対応を行うことで問題の改善や解決ができるものがあると考え、教育相談部を発足した。また、担任が一人で問題を抱え込まないようにと、教育相談部を中心としたチームをつくろうと努力してきた。しかし、少数の部員が個々にチーム援助に加わる程度で、部会全体としては機能を果たしていないのが現状である。

そこで、協働意識と教師の資質の向上を目指して情報の共有化を図りながら教育相談部の機能をより充実し活性化したいと考えた。そのための活動の拠点を「ほっとルーム」として、悩みを仲間に相談し、協力して問題行動に取り組める職場をつくりたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

教育相談部の機能の充実と活性化を通して、協力し問題行動に取り組める学校風土を醸成する。

また、協働意識を高めるための「ほっとルーム」の在り方を明らかにする。

III 研究の内容及び計画

1 協力して問題行動に取り組む学校風土

次ページの図1基本構想に示すような学校風土を目指して、研究に取り組む。

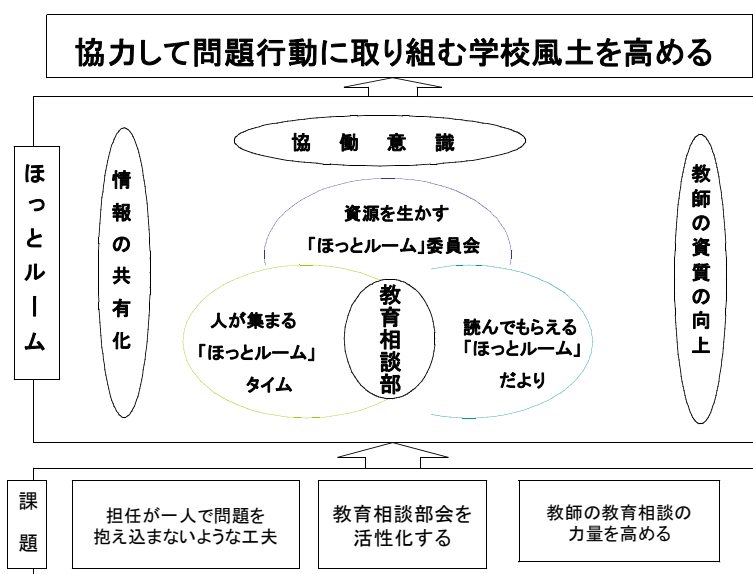
具体的な姿としては、以下のとおりとする。

- 職員間の温かな人間関係が、築かれている。
- 職員室の中が、子どもに関する話題であふれている。
- 抱えている悩みを仲間に相談できる。
- 仲間の悩みを共に解決しようとする意識をもっている。
- 教育相談の知識や技能をもっている。
- 悩みを早期に解決できるような環境や組織がある。

2 「ほっとルーム」の機能

「ほっとルーム」の機能を「ほっとルーム」委員会・「ほっとルーム」タイム・「ほっとルーム」だよりの3つの柱とする。それらが機能を発揮し、相互作用することにより職員の教育相談にかかわる資質の向上を図ることができると考える。また、教育相談にかかわる情報を収集・分

図1 基本構想



析・共有して、解決のための方策を提言し、問題をもつ児童や担任に援助をすることができると考える。計画については、図2のとおりである。

(1)「ほっとルーム」委員会

問題行動に対して多面的・総合的な問題の理解と解決の手だての検討を行い、不登校児童や問題を抱える児童に対してチーム援助の体制を作るために生徒指導部の中に位置づける。一人の児童に対して、様々な援助資源を利用しながら援助目標を立て、役割分担をして援助活動を行う。

(2)「ほっとルーム」タイム

時間と場所を設定することにより、ふだん悩みを相談したくても時間がなくて相談できない教師

や、どのように悩みを相談したらよいか迷っている教師が、悩みを打ち明けることができるようになる。その場を共有することにより、事例研究ができ教育相談の力量を高めることができる。また、いつでも・どこでも・どんな場合でも、悩みに仲間が共感し問題を理解・解決しようとする（インフォーマル・コミュニケーション）風土をつくりたいと考える。職員の中に、教育相談の研修会を望む雰囲気が出た場合には、ニーズに応じた研修会を開催する。開催場所は、「ほっとルーム」と職員室（第二の「ほっと

ルーム」ととらえる）とする。

(3)「ほっとルーム」だより

教育相談に関する情報提供を行い、知識を高め意識の向上を図るために、教育相談部から発行する。チーム援助の情報交換や事例報告から共通理解を図り、協働意識を高めることを目指す。読みたいくなるような紙面の工夫を行い、分かりやすく確かな情報を共通理解して協働意識を高める。

3 教育相談部の機能の充実と活性化

- 教育相談部の目標を明確にして、共通理解を図る。
- 外部の研修会や3つの「ほっとルーム」機能

図2 計画

	「ほっとルーム」委員会	「ほっとルーム」タイム	「ほっとルーム」だより
1 学期	・チーム援助の共通理解 ・月1回の定例会の開催	・「ほっとルーム」の環境整備 ・人が集まることを目標とする	・「ほっとルーム」とチーム援助の主旨と活動内容の共通理解
夏 休 み	・成果と課題の検討を行い、改善点を明確にしながら次学期の援助目標を立てる	・コミュニケーションを重視した職員のニーズに応じた教育相談研修	・教育相談に関する情報提供 ・チーム援助の情報と事例報告と共通理解 ・「ほっとルーム」タイムの紹介及び報告
2 学期	・連携の強化とチーム援助の継続	・学校課題を改善するための教育相談研修	・夏休みの教育相談や家庭訪問からの情報提供
3 学期	今年度の活動を振り返り来年度の活動の在り方を探る		

に中心的な役割で参加することにより、情報を集めたり教育相談の力量を高めたりする。

- 相談部員の立場や資質にあった役割分担を決め、専門性を高めた援助活動を行うことにより組織を活性化する。

以上により、今まで対応しきれなかった問題行動に対応できる機能が充実する。また、学期ごとに成果及び課題の検討を行い、改善点を明確にしながら援助活動を実施し、より活性化する。さらに、このことを通して情報や人をつなぐことにより、協力して問題行動に取り組む学校風土を高める。

IV 実践の概要及び結果と考察

1 資源を生かす「ほっとルーム」委員会の活動

昨年度から発足しているチーム援助については、新しい立場においてのチーム援助を再構成した。チームの中には、専門性の高い相談部員を中心に相談部員を必ず配置した。（事例1、2、3）今年度は、4つチーム援助が始まった。（事例4、5、6、7）昨年度からの経験を生かし、校内だけでは対応できない部分については、外部の専門機関を積極的に利用するようにした。援助会議を形式的に行うことよりも、日常の情報交換を大切にしながら援助目標を明確にして、援助活動の充実を図った。チーム援助は、大きく3つに分類することができた。不登校児童（事例1、5、7）・発達障害の疑いのある児童（事例4、

6）・問題を抱える児童（事例2、3）に対してのチーム援助である。

(1) 不登校児童の事例

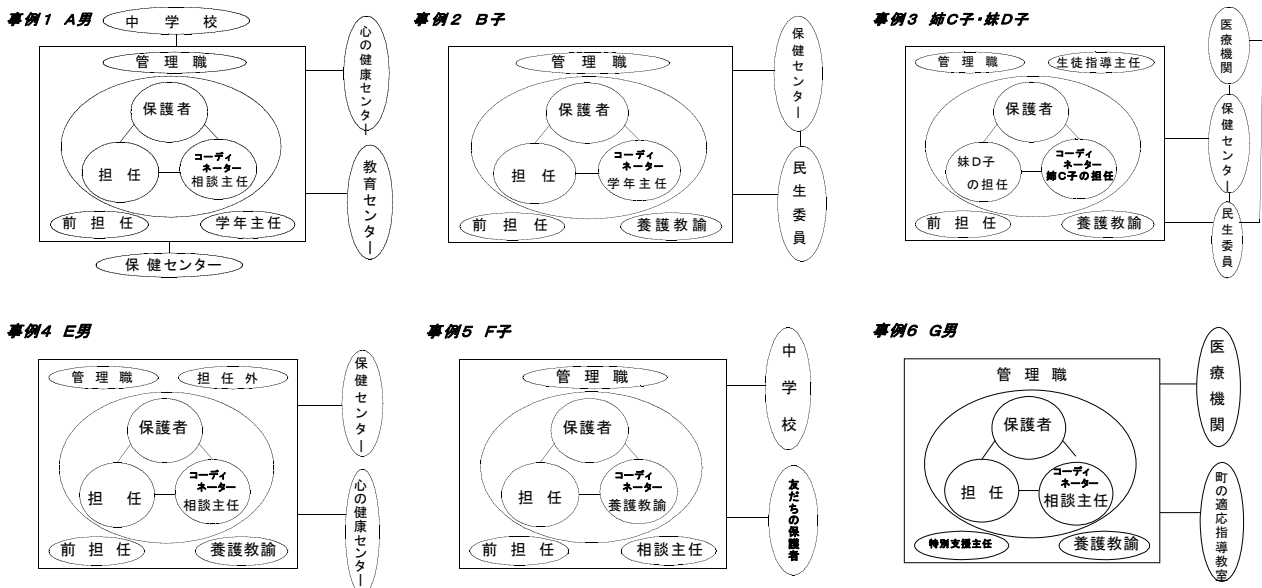
ア 登校渋りの段階

体調が不調のために欠席が目立ち始めた児童に対して、担任・相談主任（コーディネーター）でコアチームを作成し、チーム援助を始めた。保健室通いが始まっていたので、養護教諭もチームに加えた。児童の心の負担を軽減するために、各自の立場において援助を始めた。相談主任を中心に、登校時・昼休みに短時間の情報交換を行い、児童の実態にあった支援方法を考えた。放課後、チームで次の日の支援の方法を模索した。また、管理職が母親と面接を行った。教育相談部を中心とした学校の対応について説明し、今後もチームを組みながら保護者と協力して援助していきたいと伝えた。母親は、相談主任のカウンセリングを希望し、カウンセリングを開始した。

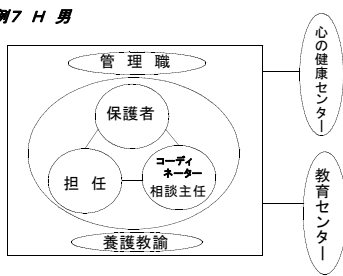
イ 不登校の段階

かなり強い登校渋りが始まった。援助会議で、「無理に登校させるより、親子の時間を大切にしたい方がよいのではないか」ということになった。保護者は、親子の時間を選択した。相談主任は、母親とのカウンセリングを継続した。欠席が始まって2週間後の援助会議で、家庭での様子から専門機関との連携の必要性を感じ、保護者と話しかけた。保護者の希望で、相談主任がこころの健康センターと教育センターに連絡を取り、チームの拡大化を図り連携が始まった。その後、担任と相

図3 チーム援助図



事例7 H 男



談主任で教育センターに来所し、問題の理解と今後の方策について話し合った。以後、相談主任が教育セン

ターとの窓口となった。教育センターからの情報を援助会議に生かして、支援を継続したところ、母親の子どもへのかかわり方に、変容が見られるようになった。

(2) 発達障害の疑いのある児童の事例

生徒指導部会で、落ち着いて教室に入っていることができない児童が話題となった。児童の実態を把握するために、管理職・生徒指導主任・特別支援教育主任・相談主任が児童の観察を行った。チーム援助が必要であると判断し、保護者・担任・相談主任（コーディネーター）のコアチームをつくった。保護者は家庭・担任は学校での様子の記録を取り、相談主任は授業や休み時間に児童とかかわりながら児童の問題の理解を図った。援助会議後、医療機関で受診した。授業への支援の必要性を感じ、町の適応指導教室からの支援を依頼し、チームの拡大化を図った。児童は、落ち着いて学習ができるようになってきた。

(3) 問題を抱える児童の事例

体重が減少し遅刻しがちな児童のチーム援助を昨年度から開始していた。今年度は、以前この児童の担任であった学年主任が、コーディネーターとなりチームを再編成した。欠席が目立つことがあり、学年主任が保健センターに家庭訪問を依頼した。その情報をもとに、子育て支援を多面的に行う方針を立てた。担任は、保護者との連絡を密にして信頼関係を築いた。保健センターに、生活指導を依頼した。以後、保健センターは、担当保健師を二人に増やした。学年主任は、担任と保健センターからの情報をつなぎながら、養護教諭にもチームに参加してもらいコーディネーターを引き継げるようにした。学校への信頼が深まり、母親が来校するようになり、養護教諭ともかかわれるようになってきた。

(4) 考 察

チーム援助を繰り返す中で、問題が解決したり改善の方向に向かったりする事例が多くなった。担任から「相談できる人がそばにいることが、こ

んなに心強いと感じたのは初めてでした」という感想があった。担任がかかわり方に迷い困ったときに、校内にチームメンバーがいることは、担任への負担を減らし、早期解決に向けた援助を繰り返すことにつながる。

日常の情報交換を密にしながら、共通目標をもち役割分担をしたことにより人間関係が深まり、お互いに存在感をもちながら、生き生きと活動する姿が見られた。また、教師が連携をすることにより、保護者からの信頼も深まった。

しかし、臨機応変に援助会議を開くことは大変難しかった。コーディネーターはコミュニケーションの機会を大切にしながら情報をつないだ。大変な事例ほど、問題解決に向けてのチームメンバーの思いは強く、しかも深かった。情報だけでなく、それぞれの思いをつなぐことも大切であると痛感した。また、学校と外部の専門機関との連携が深まる中で、教育現場で限界を感じる事例において専門機関を利用することの有用性を感じた。

1 人が集まる「ほっとルーム」タイムの活動

(1) フリー参加による「ほっとルーム」タイム

ア 事例報告から始まるフリートーク

6月：気軽に参加できるように、途中参加及び退席も自由としながら1時間程度行った。中学年の靴隠し事件・低学年の場面かん黙児の事例を出しながら、情報交換やアドバイスが出された。また、類似した4つの事例の紹介などが行われた。後半は、学級経営や生徒指導で悩んでいること・「ほっとルーム」への意見などが出された。終了後は、職員室でも会話が弾み、自分の学級や個人的な悩みについて話し始める教師も見られた。

教師のつぶやき

- ・「ほっとルーム」は、リラックスできる
- ・悩みを気軽に話すことができる、聞いてもらえる
- ・今まで知らなかった事例があり、参考になった
- ・実態が分かり、今後の授業では配慮しながら接したい

9月：2学期よりチーム援助を始めた事例と1学期に不登校になり9月下旬より完全に教室復帰した事例の紹介を行った。（事例5、6）生徒指導部会や職員会議では報告しきれない細かい内容についての説明があり、真剣にメモをとる姿や質問をする姿が見られた。後半では、特別支援教室の児童を受け入れる協力学級の担任の悩みに焦点があたった。様々な経験や立場から、多面的な問題の理解の仕方や今後の方策について話し合った。

話合いの結果、参加者の中から援助に加わる教師を決め、問題の解決を目指した。

教師のつぶやき

- ・詳しい事例内容が、参考になる
- ・悩みを安心できる場所で喋りたい、聞いてもらいたい
- ・自分にできることは、何だろう

イ 参加者のニーズにあった教育相談研修

8月：参加希望者のニーズを事前に調べ、2学期の学級経営に参考となる予防・開発的な教育相談研修を企画した。意欲的に研修に参加した教師は、熱心な取組だった。全職員に、2学期からの学級経営の参考となるように「たより」で資料を配布した。参加はできなかったが、興味をもっている教師の中には、資料を見ながら参加した教師や相談部に質問をする姿が見られた。

教師のつぶやき

- ・色々なエクササイズがあるんだ、やってみると楽しい
- ・何か、2学期に使えるものはないかな
- ・教育相談の力量を高めたい

ウ 不登校事例研究から始まるフリートーク

11月：新たに2事例の不登校が始まり、学校課題になった。事例7では、今後の援助について様々な不安を抱えていた。また、生徒指導部会や職員会議での報告だけでは、事例の共通理解が不十分であった。そこで、援助チームのそれぞれの立場からの事例報告を行った。同席していた教育センターの指導主事からも、多くの事例をふまえた指導を得ることができた。後半は、不登校児の母との連携に悩む担任（事例1）の話があった。生徒指導部会では、話しきれない担任の思いも話すことができた。担任が一番苦慮していたのは、「母との電話連絡」であった。そこで、担任の負担を軽減するために、生徒指導部会ではほかの職員が協力できる内容について提案することになった。

教師のつぶやき

- ・今までに経験のない事例で、参考になった
- ・校内には、色々大変なことがあるんだ
- ・悩んでいる同僚のために、できることは何だろう
- ・経験豊かな人からのアドバイスが、参考になる

(2) 学年に対応する「ほっとルーム」タイム

ア 学級の実態の把握から学級経営の

アドバイスと不登校傾向の児童の情報交換

7月：前回の「ほっとルーム」タイムで学級経営について悩んでいるという学級があった。また、不登校傾向の児童がいる学級が同じ学年であった。そこで、教育相談部の資質向上も兼ね相談部

員と該当学年でタイムを開催した。学級経営に悩んでいる学級では、学級の実態を把握するために学級満足度尺度（Q-U）とソーシャルスキルアンケートを事前に実施しておいた。結果と担任の学級の見立てを参考にし、ブレインストーミングで意見を出し合い、KJ法を使いながら学級の状態を見極め、今後の学級経営の方針について話し合った。様々な問題を抱えている児童が多くいる学級のために、今後も相談部が学級経営を援助していくことになった。（事例4）不登校傾向の児童については、担任・元担任・同学年・養護教諭・相談主任の立場から様々な情報交換がされた。出された情報を参考にし、担任・相談主任で保護者と面接を後日行った。（事例5）

教師のつぶやき

- ・学年主任は、自分のクラスをよく見てくれていた
- ・今まで気が付かなかった児童のよさを理解できた
- ・自分の学級経営の悩みや実態を知ってもらえたので、職員室でも気軽に相談できるようになった
- ・大変な子に、声をかけてみよう
- ・Q-Uを自分のクラスでやってみようかな

(3) 個人に対応する「ほっとルーム」タイム

ア 生徒指導への情報交換と

学級経営へのアドバイス

7月：6月の「ほっとルーム」タイムで、児童への対応の仕方や親とのかかわりに悩んでいる教師がいた。そこで、前年度の学年の担任に協力を依頼した。昨年度の対応の仕方や家庭環境の情報交換と学級経営へのアドバイスなどが行われた。生徒指導記録簿では、分からなかった細かい問題や対応の仕方が分かり、担任は指導方針をしっかりとちながら学級経営を行えるようになった。

教師のつぶやき

- ・悩みを「ほっとルーム」で話してよかった
- ・しばらくこのクラスの様子を見てみよう
- ・いつでも相談にのります

11月：職員室で、「ほっとルーム」タイムに参加できなかった担任が、相談主任に話を始めた。学級内で起きた出来事と保護者との意志の疎通に悩んでいた。前担任に、以前の事例で、保育士からの情報が有効であったとアドバイスを受けた。そこで、就学前の母の様子について情報を得た。その情報をもとに、今後の方策について話合いを行った。担任は、そのほかにも学級経営に多くの悩みを抱えていた。前学年の担任たちは、いつでも相談を受けようとする意識をもつようになった。

教師のつぶやき

- ・相談主任に、相談して良かった
- ・困っているときは、いつでも相談してほしい
- ・他機関からの情報は役に立つ、次回も利用してみよう

イ 学級で起きた問題の理解と

学級経営へのアドバイス

10月：生徒指導部会で、靴隠し事件の報告があった。ある日、「学級が落ち着かなくなり、ほかの物隠しが始まった」と担任から相談主任に相談があった。Q-Uを利用しながら、今後の経営について話し合った。要支援群に位置する児童や保護者へのかかわりに苦慮している様子が伺われた。その後も、学級の状態について話し合う機会が多くなった。

教師のつぶやき

- ・これからも、相談主任に相談してみよう
- ・今後も相談にのろう

(4) 考 察

「ほっとルーム」タイムでは、教師のニーズにこたえるために、様々な形で実践を繰り返してきた。経験年数が少ない教師・新しく赴任した教師が、積極的に参加した。フリー参加では、話したい教師・聞きたい教師が集まった。

苦しい悩みをもっている教師ほど、「ほっとできる空間」と「温かい雰囲気」の中で、「まだ、しゃべりたいんです」「聞いてください」と流れるようにしゃべり続けた。悩みをリラックスして話すことで「悩みを聞いてもらえた」「一緒に考えてもらえた」という意識をもてた教師は、職員室でも悩みを話す様子が見られた。

また、悩みや事例の経過を共通理解できた教師は、自助資源を生かしながら他の教師にかかわろうとする姿を見ることができた。内容や時間配分を工夫することで、より充実した「ほっとルーム」タイムを実施できると実感した。

3 読んでもらえる「ほっとルーム」だよりの発行

(1) 思い・情報・人をつなぐ「たより」

①「ほっとルーム」の主旨と活動内容②チーム援助・事例の紹介③教育相談に関する情報提供などの共通理解を図ったり、教育相談に関する知識や協働意識を高めたりするために、随時発行した。教育相談の知識を高めるといより、情報を共通理解することに重点をおいた。

(2) 考 察

堅苦しくない内容や読みやすい内容と分量にす

ることにより、手軽に読むことができたようである。分からない内容については、質問をする教師も見られ、教育相談への関心をもつことができた。また、事例に興味をもち会話をする姿が見られた。口頭での連絡と「ほっとルーム」タイムのお知らせを活用することで、たよりを持参しながらタイムに参加する姿が見られた。

読者と発行者に負担のかからない内容や表記の仕方の工夫が大切であると感じた。

V まとめと今後の課題

本研究では、教育相談部を中心とした「ほっとルーム」機能を「委員会」「タイム」「たより」の3つの柱とし、研究を進めてきた。職員室では、「『ほっとルーム』しよう」と声をかけあう姿が見られたり、問題行動について話し合う姿が見られたりするようになった。またチーム援助に対して「手伝えることはないか」「手伝おう」という声が出るようになってきており、協力して問題に取り組む風土ができてきた。

「委員会」では、チーム援助を組織化して援助目標を明確にしたチーム援助の取組ができた。「タイム」ではインフォーマル・コミュニケーションを重視し、話しやすい雰囲気の中で問題の解決へ向けての話し合いをすることができた。このことにより、思い・情報・人をつなぐことができ、心・人・組織が動き、担任への負担を軽減し問題の早期解決を図ることができた。また、共に問題解決をしようとする意識を高めることもできた。

「たより」では、思い・情報・人をつなぐことにより「委員会」「タイム」が協働した。

以上のことにより、協力して問題行動に取り組む学校風土を高めるには、「3つの『ほっとルーム』機能を相互作用させ、思い・情報・人をつなぎながら、心・人・組織を動かすことが大切である」ことが分かった。

今後の課題としては、様々な問題に対応しながらチーム援助の体制を継続していくためにコーディネーターを育成する必要がある。また、今年度の事例の蓄積を、効果的に次のメンバーに引き継ぎ、問題の解決を図っていくことが必要であると考える。

(担当指導主事 住谷 孝明)